

子育てにおける父の役割・母の役割

——子育てを通しての人的成熟過程と夫婦の老後のあり方——

江口昇勇

はじめに

このところ虐待の報道が新聞、TVで取り上げられることが続いている。そのことが影響しているのか幼稚園や保育園から保護者向けに「幼児段階での子育てに関する」講演を依頼されることが多くなった。また幼稚園・保育園から教諭や保育士向けの研修を依頼されることも多い。その一環で事例検討を行うことがあるのだが、そこで提供される現代の母親・父親を見ると、どうも従来の枠組みには当てはまらない新しい母親・父親の人格像が伺える。その内実は母親・父親になりきれない親たち、娘性をそのまま温存している母親、永遠の少年っぽい父親、その両者共に現実感が薄く、子育てもまるで「遊びのひとつ」のように捉えているとしか思えない現象に関係者が振り回されることがしばしばであるという。しかし、そうした新しい母親・父親の像が現実であれば、それを「今どきの若い者は・・・」と嘆いてみても仕方ない。そうした母親・父親をいかに理解するか、そしてどのように向かい合ったらよいかを考えてみたい。さらに子育てに父親が参加するということが、父親自身にとって、さらに母親と子どもたちにどのようなメリットをもたらすかを考察してみたい。

その一方で、最近の一般的な母親たちを見てみると、その多くが完璧な親であらねばと強迫的に自分を追い詰め、それを目指すあまりに自分で自分の首を絞めてしまう。余裕のないそうした親たちは自分が非難されることを極端に恐れて、問題が起こるとその責任を外在化してしまう。そうした意味では「ごく普通」の、あるいはスタンダードな親たちが少なくなり、育児放棄する群と完璧を求める群とに両極端化してきているというのが実感である。ここでは筆者が日頃、主に幼稚園、保育園で依頼される事例のコンサルテーションを通して痛感しているものをまとめてみたい。

なお、以下の文章において母性（性）・父性（性）という用語を用いるが、それについて最初にお断りさせていただく。筆者は母性性＝母親、父性性＝父親という思考法を取っていない。そもそも母性性も父性性も共に、あらゆる人間に等しく備わっている属性であり、それらが発現する環境さえ与えられれば、男性にも母性性は出現するし、母親にも父性性は出現する。心の健康度という視点から見れば、問題となるのは、個人内における母性性・父性性のバランスのあり方、あるいは夫婦単位での母性性・父性性のバランスのあり方であると考えている。つまり個人内において母性性、あるいは父性性のみが突出、偏っている場合、子どもにそれが悪い影響を与えるであろう。ただその場合でも、夫婦単位でそれを補うことができれば、影響力

を減少させることは可能となる。反面、夫婦単位での母性性・父性性の配置も、それが固定化して融通の利かないものとなるなら、相互の補償機能は働かなくなる。たとえば、溺愛だけの母親と厳格だけの父親の場合、子どもは母親を奴隷のように扱い、父親を忌避するだけの結末となる。つまり母性性・父性性は人間の心の働き、機能としてここでは扱っており、ジェンダーで指摘されているような母親や父親の社会的役割を規定するという意味では使用していないこととお断りしたい。

(1) 母性・父性が育たない、母性・父性が崩れている現実

保育園や幼稚園の園長さん、あるいは保育士さんたちの研修会で良く聞かれるのが、最近の母親に見られる母性欠如と、従順だが頼りなく「妻の言いなりになる父親」のエピソードである。ここではまず母親たちの例からいくつか述べたい。

1-1. 買い物のために熱のある我が子を預けたいと主張する親；

一人の母親が子どもを抱いて園に現れ、担当の保育士に「先生、この子なんですけど少し熱があるんです。でも私、今日はどうしてもデパートで買い物がしたいのでこの子を預かって欲しいのです。ただ、やはり子どものことが気になるので、すいませんが1時間したらデパートまで電話してくれませんか」と依頼した。たまたま通りかかった園長が「お母さん、園も忙しいのでお母さんからお電話いただけませんか、その時間には担当保育士を電話を受けられる体制に配置させますから」とお願いしたところ、その母親は「どうしてあなたたちはそんなわがママを言うの、あなた方は公務員で私たちの税金で食わせてもらっているでしょ！」と反撃されてしまったという。園長先生は「私たちは、わがままなんでしょうか」と嘆かれたのに続けて、将来、保育園を親が選ぶ時が来れば、こうしたわがママを言う親の意向を園側が受けざるを得なくなる時代が来る。その時のことが怖いと述べられ、暗澹たる気持ちにさせられた。

1-2. 自分を目立たせるためにベアルックで子どもを利用（搾取）する親

以前からベアルックで決めてくる母子はあるが、その場合は子どもを引き立てる形で親が子どもに合わせていた。しかし最近はその逆転して、親が自分自身を引き立たせるために子どもにベアルックを着せる傾向が見られるというのである。自分がどんなときでも中心にいないと気が済まない、一番目立っていないと安心できないという親が散見されるようになってきた。

1-3. 娘性を脱却できない母親と娘の母親代理を務めてしまう祖母との組み合わせ

子育てを生き甲斐にしてきた祖母が、娘が結婚して役目を奪われ、寂しさを感じていたところに新たに孫が生まれ、生き甲斐を再発見、子育てを厭う娘の意向と相俟って、祖母の母親代理が成立する。母親が母親になるには没我的献身（玉谷 1985）が避けられないものと思われ

る。生後間もない赤ちゃんを世話することはそれなりに大変であり、そこには必然的に「没我的献身」を強いられるのである。それこそ自分の美しさ、美貌、健康、生理的欲求すら犠牲にして赤ちゃんを育てる苦勞は、それまで自分の美しさを唯一の支えとしてきた女性にとっては耐えられない苦痛と映るかも知れない。だからこそ、その耐えるプロセスの中で自我を鍛え、自身の健康や美への飽くなき欲求をコントロールする力を獲得することで、自分を犠牲にしてまでも大切にすることが、自分以外の存在にあるということを実感できるようになるのである。そして、これが自分という存在の価値を相対化し、自分へのこだわりを捨てさせ、自分から解放されることにより、人間的成長を遂げるというかけがえのない体験となり、親となる過程として無くてはならない貴重なものであると私は考えている。というのも人間の成熟、人間としての尊厳を養う貴重な体験がこのプロセスには凝縮されていると思うからである。自分の命をかけても守りたい自分以外の存在を実感するということは、自分自身に呪縛されてきた過去から自分を解放することを意味しており、それまでの何事も自分中心でなければ気が済まないと言う「娘性」の放棄につながる。それが親としてのこころの成熟の中身ではないだろうか。

1-4. パチンコやコンピューター・ゲームに夢中になり、子どもの存在を忘れてしまう

勤勉性を習得するという発達課題が児童期までに達成されないう大人になる人たちがいる。彼らは、子どもの頃の遊び癖が大人になってもそのまま継続し、子どもができて自分自身の子ども性から卒業できない。そして、自分の子どもに対してライバル葛藤を抱え、お互い刺激し合っ、さらに幼い子どもの状態に退行してしまい、結果的に自分も、自分の子どもも勤勉性を習得する機会を失って、子どもの状態から抜け出すことができなくなってしまうのである。

1-5. 精神的内実性よりも現実的物質性を優先する

親自身、自分の親に大切にされた経験が無いと、精神性が育ってなくて、没我的献身の意味や価値を見いだせない。その結果、目に見える結果しか信じることができず、パートナーが全面的に子育てに協力してくれないと怒りを爆発させる。その一方で、子どもを産めばパートナーを自分に縛り付けることができると思って子どもを産みたいと主張する。子どもへの愛情ではなく、パートナーを自分に縛り付けるために利用する即物的、刹那的発想が根底にある。

1-6. 障害のため自分のことに精一杯で子育てまでとても気持ちが向かない

母親自身が知的障害や精神障害あるいは人格障害を有しており、自分自身のことだけで精一杯で、とても子どものことまで気が回らない場合もある。勿論、福祉的な援助やパートナー、親戚、地域社会の子育て支援ネットワーク等のサポートがあれば育児は可能である。しかし、現実にはそうした状況はなかなか期待できない。そのためそれらは最終的には消極的ネグレクトタイプの虐待に発展する危険性が高い。ただ、このタイプの虐待は、拒否されるという要因がないため、母代理の適切な対応により、著しく改善されることが経験的に言える。

1-7. 虐待する親

虐待する親に関して、我々専門家が注意しなければいけないことがある。虐待と聞くと我々はその親を一方的に非難しがちである。しかし、虐待をしてしまう親には必ずと言って良いほど、その親自身が虐待体験を持っていると言われている。自分が甘えたいときに親から拒絶された経験を持つ人が自分の子どもから甘えられることになることになると、自分自身が甘えられなかったことからくる傷付き、つまり内なる「傷ついた子ども」が刺激を受けて、子どもが甘えてくると生理的に子どもを拒絶してしまうのである。そして子どもに甘えさせることができない自分を責めるようになり、無理に甘えを受け入れようとするが、それも徐々に無理となり、最後は自分を責める原因となる子どもを憎むようになる。子どもが甘えを要求すると、それが自分を押しつぶすように感じて、子どもに虐待を加えてしまうのである。

虐待に関する我々の陥りやすい落とし穴として、被虐待体験している人に「あなたも自分の子どもに虐待してしまうかもしれない」と告げることがある。これは被虐待者に不安をもたらし、子どもを産むことへの抵抗をもたらすことになる。実際に被虐待者の中で自分の子どもに虐待する比率(37%、森田 1995)は、虐待をしない人より少ないのである。

(2) 母子カプセルが強化される我が国の現状

以前に比べると最近では父親の育児参加が多く見られるようになってきた。こうした父親の育児参加にもかかわらず、母親が子どもを呑み込む状況はむしろ増強されていると感じるし、母子の密着(それをここでは母子カプセルと呼ぶ)は依然として強い。そして、それが子どもにもダイレクトに影響を及ぼし、子どもはいつも母親の顔色を伺いながら行動していたり、反対に母親に対して暴君、女帝のように振る舞ったりしている。ここではそうした母子関係が子どもにどのような影響を及ぼしているかを見ていきたい。

2-1. 完全な母親を求める社会の風潮

近年、マスコミや教育界の風潮として母親に対して、「母親として完全でなければならない」「パーフェクト・マザー」を期待する姿勢が特に強くなりつつある。虐待の記事が週刊誌に載ると大きく「鬼母!」と書かれるし、子どもが保育園・幼稚園・小学校・中学校で問題を起こすと、母親が呼びだされ子育てについての指導を受けることになる。その一方、父親は何も言われぬという不思議な現象が見られる。ある母親は、「自分だけで学校に行くと教師の風当たりがきついが、父親同伴となると教師の対応が手のひらを返したように柔軟になる。だから、重要な事柄の時は、何も発言しないと父親に約束させて一緒に出向いてもらう」と語ったことがあるが、あながち誇張とは思われない。実態とか内実性がないにもかかわらず、父親ということだけで我々、専門家や教師の過大な配慮があるように思われる。その反対に専門家や先生方の母親への過重な要求の背後には、何か子どもに問題があるとそれを母親の躰の方法に直結させて関係づける傾向が見られる。もちろん、それが正しい場合もあるとは思われるが、

臨床現場で仕事をしていて感じるのは、親の側に病理性がある場合を除いて、大抵の場合、親は親なりに努力をしているのであって、それでも事が上手くいかない場合には子どもの側に軽度発達障害のような問題を抱えていることが多いという経験である。

前にも述べたが、最近の母親を見ていると「普通の母親」と呼べる人たちが相対的に少なくなり、「良い母でなければ」と強迫的に自分を追いつめていく母親の群と、最初から母性を放棄し、母親になろうとしない群とに二極分化し、年々その傾向に拍車がかかっているように感じている。

2-2. 「良妻賢母」と「いい子」のセット

この節ではまず前者の「良い母でなければ」というタイプを取り上げ、それが形成される背景、土壌を見ていきたい。もちろん、そこでは同列に「父親」の存在も考慮されなければならない。子育てについて母親だけが単独に扱われること多いということ自体、我が国の子育ての現状を物語っているが、本論では母親の役割と父親の役割をできるだけ対応させながら考察していきたいと思っている。

厳格な親に育てられ、社会の風潮の影響をもろに受けて「完全な親」を自分に求められていると思ひ込み、それをまともに実行し、「良妻賢母」にならねばならないと強迫的に自分を追ひ込む人々がいる。その行動の背後には「万能で、完全無欠な誇大な自己像」に呪縛された自己愛病理が伺われる。そして、「良妻賢母」であるためには、我が子が「いい子」であることが条件となり、無意識の内に我が子に「いい子」であることを期待する。しかし、「良妻賢母」であらねばと思っているので、あからさまにそれを子どもには求めない。ただひたすら「子どものことを何よりも優先する優しい親」を演じるのである。その結果、「良妻賢母といい子」の母子カプセルを形成することになり、それを実現するために、子どもは親が描く「いい子」のイメージを生かされることになる。そのイメージ通りに育たないと親は不安になる。更に自分で子どもを育てること、教育することに不安があると、それを専門機関に委ねることになる。インターネットや知り合いからの情報を集め、その地域では最高と呼ばれる教育の専門機関を探し出す。月曜日は英会話、火曜日は算数、水曜日はスイミング、木曜日はそろばん、金曜日は絵画教室、土曜日は習字にサッカー、日曜日は特別の英才教育、野外教室、と母親は子どもを忙しくあちらこちらに運ぶ、「キャリア・ウーマン」となる。経済的に苦しくなると子どものためとばかり内職やパートに精を出す。そうすることで自分は精一杯のことをしていると自己満足ができるのである。彼女たちは、自分が直接子どもとかかわることに自信がない。下手に自分がかかわることで子どもに悪影響を及ぼすことが不安なのである。自分よりも専門家に我が子を任すこと、その専門家を探すことにエネルギーを注ぐことに、自分の存在意義を見出すのである。自分が無理して教育投資をしているため当然、その見返りを子どもに期待する。しかし、良妻賢母でなければいけないと思っているので、それをあからさまに見せることはしない。全身から「頑張ってね」というオーラを発するか、「目が口ほどにモノを言う」対応をするのである。

2-3. いい子を演じさせられる子ども

親のそうした想いの傍らで、子どもは自由を奪われ、それぞれのお勉強の場面ごとに、「優秀な成績を収めること」が親の期待に添うことであり、彼らは一生懸命に努力する。しかし、好きでやっている訳ではないので、集中力はつかないし、毎日がつまらなく、追い詰められていくので、園で他児をいじめたり、他児の大切にしているものを隠すなど厭がることばかりをする、自分が傷ついているからそうするのであり、それはSOSのサインでもある。親は愛情いっぱいなのに子どもが園でそうした問題行動を起こすのは、愛情の方向が違うからである。力のある子は親の期待を察知して「良い子」を演じ切ることが、その子の能力に応じて、ある年齢までは可能となる。それができない子は鬼っ子となり、親を追い込み、追い詰められた親が虐待に走る。しかし、力のある子でも、小学校、中学、高校、大学、会社に入ってから、どこかの時点で力つき、挫折していく場合が多く、やがて「不登校」、「引きこもり」となって、私たちと出会うことになる。

というのも、親は子どもへの期待をあからさまには伝えないが、全身からオーラを發して自分の期待を發信する。子どもは親の期待をあれかこれか勝手に先読みして、それを必死に努力して獲得していく。ひとつを成就すれば、次はそれを上回る結果を出さねばならなくなり、自分で自分の首をどんどん締め上げていくことになる。こうして、学業成績、スポーツ、友人関係、趣味とありとあらゆる領域で万能感を満たす、誇大な自分しか許せなくなり、自分の限界までそれを追求し、それが破綻すると「引きこもり」という防御スタイルに陥るのである。

こうした人たちがいったん引きこもりに陥ると、再び元に戻るということはとても困難となる。なぜなら元に戻るということは、それまでの自分と同様、自分の能力の120%～200%を出し尽くすと言うことを意味しているからである。ここからの離脱のためには、母親は良妻賢母を辞めることを、子どもはいい子を辞めることを課題としており、それを実現することがいかに困難かを、不登校、親子との十数年のつきあいの中で骨身に沁みて実感させられている。

2-4. 父の出番を準備するために「弱い女」を演じること

母親を追いつめ、母子カプセルを形成しやすいのが我が国の現状であるが、それに歯止めをかけ、母子カプセルにくさびを打ち込むのは父親の役割である。私は父-母-子どもの関係を相撲に例えるとき、父は土俵であり、行司役を担い、その土俵の上で、行司の見守りの中で、母親と子どもが相撲を取る姿を理想として思い描いている。しかし、我が国ではこうした私が描く理想の姿とは全く別の現状が見受けられる。実際、父親の子育てに関する責務についてはマスコミも識者もあまり取り上げられず、子育てのために育児休暇を取る父親のことが新聞の記事になるほどである。であるが故に、父が父親の役割を放棄することがあっても社会的な批判・制裁はほとんどなく、父が父親の役割を背負う義務について世論があまりに寛容的でありすぎると思われる。そうした背景もあって父親を当てにしない、当てにしたくても当てにできないから母親が自分で頑張るしかないという現実が生じるのである。私はこうした状況から脱却するために、本当は芯が強く、父親の援助を当てにしなくても、一人で十分に子育てがで

きる母親であっても、あえて子どもと夫のために「弱い女」を演じることが大切であると思っている。しかし夫に頼らず、無理して子育てをしてきた母親にとっては、今更、プライドがそれを許さない場合もあるであろう。あるいは自分の父親に溺愛された「父の娘」の場合、自分の父親以外の男性を尊敬することができないという病理もある。むしろ、いかにして「弱い女を演じるか」、見せかけだけでよいので弱い女を演じるだけの演技力や精神的逞しさ、したたかさこそが今日では求められていると考える。私はこの問題についてよく、「の」の字を書く練習の大切さを提唱している。つまり夫の前で「私、一人では子育てができないの！」と弱い妻を演じ、夫に否応なく子育てに協力させる機会を作る、与えてやるのである。

2-5. 子どもの言いなりになる親と暴君・女帝のセット

このところ、どの教育現場でも聞かれる「キレル子ども」たちとその親たちの問題を考えてみたい。自分の思い通りにいかないとパニックになり、見境無く暴れ回る子どもたちを前に、周囲はやむえず、次第に彼らに迎合的になって、彼らは益々わがままさが助長され、とどまることを知らないほどになる。しかし、家庭内では許されても社会に出ればそのようなわがままは通じない。そこで彼らはまずトラブルメーカーとなる。そして、徐々に集団内に居場所を見つけれなくなり、遂には逸脱行動に走り始め、最後は反社会的行動に突入していかざるを得なくなり、結局は不幸な末路が待っているのである。

こうした行動の源になっているのは、彼らを育てた親たちの子どもに対する養育態度である。例えば親が子育てに自信がなくて、子どもに嫌われることを恐れて、毅然とした態度がとれない。子どもを叱るときでも自分の責任でなく、「あのおじちゃんが怖い顔するから止めようね」と子どもに哀願するのである。親が自分の責任で社会の価値体系を、躰を通して子どもに伝達することができないとき、子どもは厭なことや好きでないことを我慢する、忍従することを知らないままに過ごすことになる。本来ならば三歳までにこのような我慢や忍従を通して自我を鍛え、自分で自分をコントロールする力を獲得すると同時に、厭なことを我慢し、それを抱え続けることで、他者の我慢や痛みが分かり、それに対する共感性も養われていくのである。子どもの成長には厳しい環境の中でも、自分を冷静に維持し続ける力を養うという大切なプロセスが存在する。しかし、上記の親たちはそうした試練を子どもに強いることができない。子どもに我慢を強いるには、親にもその辛さを共有する覚悟と忍耐が必要となる。それが厭なために自分と子どもの間には緊張感を持ち込まず、自分たち母子は何も悪いところはない、自分と子どもは完全無欠と思いきむのである。当然ながら不都合なことが起こると、悪いのは全て外の責任だとする親の態度を見て、子どもは自分に責任があるとは露も思わず、自分の思い通りにならないと、それを実現できない周囲が悪いとばかりにパニックになり、暴言と怒りに満ちた行動を取るのである。子どもに愛情を注ぐということの中身には、子どもに我慢を強いることも含まれる。問題はそれの際、親もその辛さを子どもと共有する意志があるかどうかという点である。子どもが自分の思うようにならない状況で、身体をひくひく震わせるとき、その辛さを一緒に深く味わいながら、それでも駄目なことは駄目という原則を親がそばに

いながら立ち尽くすとき、親もそれがつらいことだと分かることで、子どもはその厭な体験を抱えることができるのであり、その抱える量が大いほど、他者を受け入れる力量も大きくなっていく。そして対人関係の基盤を自分の内に準備するのである。

子どもに隷属する親、子どもにどう対すべきかが分からず、粹を持たない親の子どもが暴君、女帝となるのである。そのメカニズムは、親が自分の言う通り、思う通りに動くため、自分の思いはいつでも、どこでも実現できると思うようになり、自分は特別の存在であり、周囲は自分のそうした思いを先読みして、自分が言わなくても自分の思い通りに動くべきであると信じて疑わなくなるようになるのである。このような自己愛的思考と行動が強烈に形成され、周囲が自分の思い通りに行動しないと自己愛憤怒から即座にキレル、そして周囲に対して攻撃的、破壊的な言動を取り、自分の責任を棚上げし、一方的に外罰的、他罰的となり、責任転嫁の言動を延々と繰り返すことになるのである。このような子どもに迎合する親と、暴君・女帝の子どもとのセットが、幼児教育や小学校、中学校の現場で際限なく広がり、それが拡大再生産されているのが今日の現実である。

2-6. 子どもに軽度発達障害がある場合

身体障害などのように見た目にはっきり分かる障害や、明らかに障害と分かる中・重度障害の場合と比べ、健常児と一見、区別がつかないような軽い発達障害の場合ほど、親にとっても子どもにとっても障害受容は逆に容易ではなく、親も子どもも障害に直面化することを回避し、遷延化する傾向がある。特にPDD（広汎性発達障害）の内、アスペルガー症候群の中でも知的障害を持っていない場合やADHD（注意欠陥多動性障害）のように知的障害が無く、脳の代謝障害による集中困難、衝動性のコントロール不足、多動の問題がある場合、さらにLD（学習障害）のように書字、読字、計算の能力に障害がある場合、それらを障害ではなく、行動の偏りや性格の偏り、対人関係のスタイルの特殊性等と見て、正常、普通の範疇での「個性」として捉えようという志向性も関連者の間では共有されていることもあって、子どもの実像に迫ることはなかなかできなくなる。私はここには詳しくは述べないが「障害者元型」（江口 1998）の重要性を指摘しておきたいと思う。

一方、子どもたちは障害から生じる様々な問題を日常の中で絶え間なく露呈し、それらは親を含めて周囲に少なからぬ混乱をもたらすことになる。しかし、それらが障害によるものという正しい認知がない場合、それらは全て親の子育ての問題、躱の問題と判断されがちである。周囲が子どもの問題行動を障害としてではなく、親の養育の問題として親に責任をかぶせる場合、親は周囲から子どもを厳しく躱るように要請される。しかし、いくら厳しく躱ても障害故に、子どもに行動の変容は起こらない。焦った親はさらに厳しい躱を子どもに施し、客観的に見たらそれは虐待と何ら変わらないことになる。障害への正しい認知があれば、無理な躱より、障害を受け止める方向での妥当な努力につながるものが、それがいないために虐待となっていく、子どもは障害ばかりでなく親の虐待という二重の負荷を追うことになる。その意味で、こうした障害の早期発見、早期対応の体制が一刻も早く整備されることを望むものである。

(3) お父さん出番ですよ！

—子育てにより父親として成長・成熟する場合と挫折する場合—

これまで見てきたように、我が国の子育ての現状はかなり厳しいものがある。ここではそうした現状を打開する方法論の一つとして、「父親の積極的育児参加のすすめ」を述べていきたい。というのも、子育てに参加することは、何もパートナーや子どものためではなく、何より父親自身のためであるという持論を体験的に持っているからである。子育ての中で母親が没我的献身により成長・成熟するように、父親としても成長・成熟をするプロセスがある。それは人間的成熟には欠かせないものと考えており、実際、そのプロセスを逃げた父親の老後はかなり厳しく、淋しいものと思われる。

3-1. 「忠実な長男」・「爺や」・「ペット」・「生ゴミ」・「粗大ゴミ」の父親

これも保育園の園長さんから聞いた話であるが、最近の父親は以前の親より子育てに関心を持ち、積極的に子育てに関与しているように見えると言う。しかし、よく観察してみるとその積極的関与の中身に問題がありそうだと指摘する。というのも、関与はしているものの、自発的、主体的であると言うよりは、パートナーから暗に離婚をほのめかされて無理矢理に協力要請を受け、しぶしぶそれに従っているため、どこかぎこちなくて、様子がおかしいというのである。それは一家の主としての「父親」と言うより、母親の「忠実な長男」のような振るまいと感ずるというのだ。例をあげると、ある園児が他児に対して乱暴な行為を絶え間なく行うので、母親を呼んで家庭での協力要請を行ったところ、その母親は自分の子どものことは棚に上げ、他児や園側に責任転嫁する他罰的な対応に終始した。ある時、その母親が父親を連れてやってきた、子どもが他児にいじめられたので園の責任を問いたいという一方的な抗議のためであった。実際はその子どもが執拗に攻撃するために我慢できなくなった相手が反撃したのが真相であった。母親はいつもの通り一方的に話し終わり、夫に発言するように目で合図した。園側は父親なら客観的立場から冷静な意見が聞けると期待して固唾を飲んで待っていると、父親の口から出た言葉は、先ほどの母親と全く同じ台詞をあたかもコピーのごとく語ったのである。明らかに家で妻からあらかじめレクチャーを受け、それを忠実に守っているに過ぎないことが判明した。その姿はまさに母親にとっての「忠実な長男」そのものであった、と言う。最近結婚しない女性が増えて、結婚にたどり着ける男性は幸運とさえ言われる。勢い、結婚したら妻から三行半を渡されることを恐れて妻の言いなりになるのであろう。そのため子育ても決して自分の意志ではなく、それをしないと離婚される不安から形のみ協力しているのが実情のようである。

そのように見ていくと、最近の夫、あるいは父親は妻や母親にとっての「爺や」か「ペット」、さらに、歩く「粗大ゴミ」か「生ゴミ」にまでその地位は低落していると思われる。

3-2. 子育てから逃れて挫折する場合

子どもを産むということだけであるならば、セックスをすれば誰でも父、母になれる。しか

し、それは生物学的、動物次元の父、母となることであり、決して父親、母親になるということではない。「親になる」ということは「子育てをするというプロセス」の中においてこそ始めて可能であり、それを通じてようやく父親、母親になることができるのである。それも子育ての最初の時期；生後～3歳になるまでに、親となる大切な儀式が母親にも父親にもあると考える。先に、父親は母親と子どもが繰り広げる相撲の土俵と行司役という大切な仕事があると指摘したが、母親が安心して我が子との母子関係を築くには、基盤としての土俵が安全に機能していることと、自分の行き過ぎや不足している部分を行司役である父親が指摘することが何より重要である。

一番肝心な時期に子育てから逃げ出した父親にはその後一貫して、家庭内で存在感を失い、妻からは当てにされず、子どもからは他人と思われる運命が待ち受けている。そして、そうした家族の反応からますます家庭を顧みなくなっていく。父親は父親で、育児から逃げていることに密かに罪悪感を持ち、悔やんでいることが本当は多いのである。しかし、「の」の字を書くことができない母親が子育てに専念して、一人で頑張ってしまう、周囲を寄せ付けないようにすると、手伝いたくてもチャンスがなくなるという事実も存在する。父親役から逃げた父はやがては家の中で「一番、手の掛かる長男」となる。父親の健康度が低いと、子どもは妻を奪うライバルと映り、我が子に嫉妬心に向け、最悪の場合は虐待する場合もある。その背景には、その人自身が愛されてこなかった過去があり、そうした人を安易に責めることはできない。

先にも述べたとおり子育てから逃げ始めると、そのことで罪悪感を持つことになる。そこに妻から子育ての協力を求められると、この罪悪感が刺激され、つい激しい怒りを露呈することになる。その状況から逃げるために仕方なく仕事に逃げる、あるいはギャンブルに走る、不倫・浮気に埋没し、さらに泥沼にはまるということになる。臨床現場ではこうした事例は枚挙に暇がないほど多く見られ、不思議なことではない。

父親が逃げた家庭では、ますます母子カプセルが強化され、父親の家庭での位置づけは単なる下宿人となる。成長した子どもはやがて父を他人と感じ、「この人、誰？」とところの中でつぶやき、空気のような存在となる。

3-3. 空の巣症候群に陥る母親

乳幼児期から思春・青年期までの忙しく、気ぜわしい子育ての時期が終わり、子どもが健康に成長したとすると、子どもたちは親から自立する動きが始まる。その際、子育てこそが自分を支える全てであるような母親にとって、その現象はもう自分の役割・支えがなくなることを意味する。一方、子どもが不健康に成長すれば、子どもはいつまでも親から自立することはできなくなり、パラサイトシングルとして親と共に一生を過ごすことになる。現実にはこうした家庭が着実に増えていると言われ、70代の母親が同居で暮らす50代の一人息子の結婚相手を真剣に考えており、その息子も未だに結婚できると信じて、母親の思いを共有しているという話を保健婦さんから聞くことが多くなった。50代のその男性と話しをすると、まるで20代の若者のような思考であり、年は重ねても、心の年齢は20代のまま、ストップしている、と感

じたそうである。

一方、子どもが健康に育った場合、当然のことに親から自立をしていくことになる。そして残された親たちが愛情で結ばれていなかったなら、子育てだけを生き甲斐にしてきた母親にとって、それは愛すべき唯一の対象を喪失することを意味する。それは依存すべきヒナを失った母鳥のごとき「空の巣症候群」に陥る事を意味し、母親は抑鬱的になり、キッチンドリッカーになったり、不倫に走ったりするのである。

子どもが3才までの乳幼児期の間は、親は子育てに専念するべきであるという持論を私は持っている。もちろん、このことは共働きを否定したり、女性を家に縛りつけることとは一線を画しており、あくまでも気持ちのあり方としてのことである。しかし、児童期以降はむしろ徐々に手を抜くこと、そして子育てが生活の一部にしかすぎないという自覚と認識を持つ必要があると思っている。専業主婦の場合、母親は子どもの成長に伴い、自分自身の楽しみを見つけ、子育てを忘れることも大切であって、それが子離れや、「内なる理想の子」を殺す「子殺し」の練習、準備となるのである。

その一方、母親が子育てを終えた頃、仕事のピークを越えたり、定年を間近に迎えた父親はやっとこれからは妻と一緒に過ごせるものと思いき、そのように妻に働きかけもするが、これまで家庭を見向きもせず、家事協力について全く実績がないため、妻はもはや夫を相手にしようとは思わない。しかし、夫はそうした妻の気持ちに気づかず、濡れ落ち葉のように妻にしがみついてくる。こうして空虚な老後の夫婦生活が始まる。これまで夫が家にいないからこそ夫の存在にも我慢できていたが、毎日一緒にいられると、これほど厭な存在であったのだと、改めて感じさせられるのである。そのために妻から三行半を申し渡される場合すらある。

3-4. 妻の知恵と工夫

ところが世の中には本当に多忙で、本人は子育てがしたいと思ってもそれが許されない父親がいるし、単身赴任という状況で子どもとかかわることが事実上できない父親もいる。そうした場合こそ、母親の知恵と工夫が必要となる。例えば、母親はことあるたびに「お父さんはいつもあなたのことが大好きで、あなたのことを心配しているよ」と子どもの耳元で囁き続けるのである。このようにして子どものこころの中に、父親のイメージを刻印づける、あるいは父親イメージを育てあげるのである。父親が自分のことをいつも気にかけていると思えば、たまの日曜日に家に父親がいれば、子どもは父親めがけて甘えていく、子どもに甘えられて、それを嫌がる親はよほどの問題を抱えていない限りあり得ない。そして時には子どもにおみやげを買ってくることにもなり、父子関係が形成され、子どもの心に父親の良いイメージがさらに育てられていくのである。

子どもの心に父親のイメージが育ち、それが子どもの行動に影響力を持つようになると、子どもが自分の進路に迷ったとき、自分の判断に自信が持てなくなったときなど、いざというときに母親の意見と父親の意見という二つの幅のある選択肢から自分が気に入ったものを選ぶことができる。万が一、子どもの心に母親の価値基準しかない、子どもは母親が期待するもの

が実現できなかったとき、母親を裏切ったという罪悪感と挫折感から自己評価を低くし、時には自暴自棄になることも希ではない。良妻賢母の子どもが不登校や引きこもりに陥るのはこうした状況である。ここで、母親の価値基準を相対化する父親の価値基準が布置されることで子どもは自分を客観視でき、ここに余裕が生まれるのである。

3-5. 子育てにより父親として成長・成熟する（私の個人的体験）

子どもとの関係に焦点を合わせると、基本的に母子は放置しておけば、自ずと密着する方向性にあると考えられる。他人の子であっても赤ちゃんは可愛いと感じる。ましてや自分のお腹を痛めてこの世に送りだした我が子であれば、よほどの病理性を抱えた親であれば例外はあるだろうが、一般的にはそれこそ「目に入れても痛くない」ほど可愛く感じられるであろうし、それが母性と呼ばれるものである。先にも述べたが、私はこの「母性」の機能は母親のみに限定されて存在するものとは考えていない。実際、私は生後数ヶ月の長男をパートナーに代わって日中、子育てをした時期があった。当初は戸惑ったりしたが、暫く一緒に生活する内に自然と子どもの泣き声で大体の要求は見分けられたし、むずがる長男をあやしなながら、子育ての楽しみを堪能できたと思っている。その時に、母性は人間にとって普遍的なものであり、条件が満たされれば母親、父親に関係なく子どもと生活を共にし、子どもの欲求、要求するモノを理解しようとする意志さえあれば、誰にでも育てていくものであることを実感した。

また、下の子どもが幼児期において軽い注意欠陥多動性障害（ADHD）の傾向を見せており、パートナーが子育てで追いつめられ、子どもを虐待してしまいそうと訴えたため、否応なく子育てに協力しなければいけない時期があった。当時は現在ほど忙しくなかったこともあり、定時に職場を辞して急いで帰宅して、子どもたちと遊ぶように心がけた。そのお陰で子どもたちは私の帰りを玄関で、今か今かと待ち受けており、私の姿を見ると胸に飛び込んできた。彼らにしてみれば私は「遊んでくれる人」という認知が定着したのであろう。それを契機に、子どもたちはそれぞれの発達段階で私に父親としての役割を演じさせてくれた。

このように子どもとかかわることで私自身、父親としての自覚とともに多くのものを学び、さらにそれ以上の恩恵を受けることになった。それは実り豊かな老後を約束するものと考えている。

3-6. 子育てに父親が参加することで得られるメリット

最後に、子育てに父親が参加することで得られる家族、それぞれのメリットを、子ども、母親、そして父親自身の三者の立場から論じてみたい。

a. 子どもにとってのメリット；

子どもにとって父親と遊ぶことは母親とは違う刺激を味わう。母親は基本的に子どもを守ろうとする姿勢が強く、子どもが怪我しないように何より安全を優先する。そのために母親の前には子どもは大きな見守りの中でまったりとした、優雅な状態に置かれる。一方、父親は基本的に子どもっぽくて、子どもと遊ぶとすぐに少年に戻っていく。そのために、子どもは母親にはないダイナミックで危険な遊び、身体を使った遊び、乱暴な遊びを楽しみ、違う世界を味

わう。しかし、そこには危険も隣り合わせであり、子どもはまったりというより、いつ、何が起きて自分を守ろうと緊張感を持って過ごすのである。このようにして子どもは父親の介在により、母親との間に距離が生まれ、母親を相対化することができるので、母子カプセルからの脱却を可能とさせる機会を持つのである。さらに子どもが小学校、中学、高校、大学と進むに伴い、思春期危機、青年期の同一性拡散の危機、将来の夢に向けての挑戦をする危機など、人生における節目節目に父親、母親の二人の考えを聞くことができ、ある程度幅のある選択肢の中から、自分が「これがよい」と判断できるモノを見いだすことができるのである。そのためには父親と母親は必ずしも、同一歩調を取る必要性はなく、それぞれの価値観を提示すればよいのではないかと考えている。もし、母親だけが唯一の判断材料となる価値基準であった場合、それに合致しない、あるいは母親の期待値をクリアできなかったとき、子どもは挫折感と母親を裏切った罪悪感から、自己評価を低くしてしまうことになるのである。

b. 母親にとってのメリット；

父親が子育てに介入することで、母親はとりあえず時間的、空間的に子どもから離れられることができるので、まずはホッと一息つくことができる。そして、父親と遊ぶ子どもを距離を置いて見ることで、自分の対応を反省したり、内省することができる。あるいは父親の遊びを模倣して、自分と子どもとのかわり方の刺激材料にもなる。父親の前で見せる子どもの姿から、自分には見せない子どもの意外な側面を知ることにもなる。こうしたプロセスによって母親が沈着冷静となり、本来の自分自身を取り戻すことができる。

そして何より、一番しんどいときに夫が言葉だけでなく、行動次元で自分を直接援助してくれることで夫への信頼感と感謝の気持ちが生じる。父親が子どもと遊ぶことで、子どものことを父親もよく分かるようになり、子どもの問題行動を夫婦が同じ水準で話し合うことができる。そして共通の認識で子どもの成長を見ていける、子どもが小学生の時は小学生の親に、中学に進めば中学生の親に、高校になれば高校生の親にと、子どもの成長に伴い夫婦が同じ歩みで育っていくことに意味がある。それは夫婦が歩調を合わせ、問題を夫婦ふたりで抱えることになるからである。これがあるからこそ、母親にとって父親は無くてはならない存在となり、子育ての戦友という気持ちが生じるのである。一番大切な時期を二人で歩んだという経験は夫婦の絆にとってかけがえのないものとなり、それは豊かな老後の夫婦関係を約束するものとなるろう。

c. 父親にとってのメリット；

父親としての意識を持ち続けるには、母親や子ども、家族から、父親として信頼できる人、存在感があり、経済的ばかりでなく精神的にも大黒柱として位置づけられているという認知を受けていることが条件となる。そのためには、一番大変な乳幼児のときから父親として子育てに参加することがパートナーや子どもの信頼を獲得するチャンスである。私自身は先の経緯から子どもと密接にかかわることになったが、それによりパートナーと子どもから父親としての期待を受けてきたと思う。それを実現する努力が最初はあったが、途中からはそれが楽しみに変わっていき、最後は、子どもたちによって自分が父親にさせてもらっている、父親の体験を

深く味あわせてもらっているという実感を持つことになった。それは私自身の人間的成長・成熟過程にはなくてはならない貴重な体験であったと、今にして改めて実感している。子どもから慕われ、パートナーから信頼されて現在を生きているつもりでいるが、それらは子育てにおける実質的なかわりから生じていると思ってる。

一方、私は臨床家として不登校の子どもを持つ親たちの面接を手がけてきた。そこでは子どもを不登校にする親側の要因を厭うほど見ることになった。そのために私は自分の子どもにだけは、そのような反面教師の失敗をしないように心がけてきた。パートナーはごく普通の主婦であるので常識的な価値観から子どもに普通に期待をかけ、それを伝えていた。私自身はどちらかといえば子どもの判断を優先する理想的な父親を演じてきたといえる。それはしかし、口で言うほど安易なことではない。かなり苦勞して理想的な父親であろうとしてきたが、それは、「あまりに信頼されると自分で自分の行動に責任を持たねばならないから大変」と子どもに言わせることにもなった。

私は子どもを信じている。その前提は自分を信じることである。自分を信じればこそ、相手も信じていることができる。そして自分を信じることは、自分を許すこと、ありのままの自分で良いと自分に言い聞かせることにある。それを子どもとパートナーと共有できていると、大きな安心につながると思っている。

あとがき

本論は日頃、保育園や幼稚園で子育てに関する保護者向けの講演を依頼されたときに話す内容をまとめたものである。今後、姉妹編として保育園・保育士、幼稚園・教諭向けの論文を執筆したいと考えている。なお、実際の講演では自分自身の子育ての体験を詳しく述べているが活字となると家族のプライバシーが守れないと思い割愛させていただいた。

引用文献

- 1) 江口昇勇：社会福祉における影元型と障害者元型 愛知淑徳大学「論集」第21号 p23-36
- 2) 玉谷直美：女性の心の成熟。創元社、1985
- 3) 森田ゆり：子どもの虐待－その権利が侵されるとき－。岩波ブックレット NO.385 1995